

空



2005年
SORA 9号

晴夜 (9) | 1

柴田 佐知子

狼に古墳の月の上がりけり

空塞ぐ山を神とし冬籠

障りある地なりたつぷり霜を置き

うしろより恋文覗く雪をんな

紺に身を包んでゐたり斧始め

伐り倒す木が冬眠の山を打つ

気の滅入る日よ甘鯛のやはき身も

たちまちに火の輪飾りとなりにけり

遠火事

高倉和子

誓文払ひ猫の走れる仏壇屋

値札なき壺の怪しき年の市

みどり子を抱きしやうな日向ぼこ

抽斗の中の雑事や冬籠

湯ざめして花の名前を忘れたる

すり傷の湿りてきたる暖房裡



組みかへる足より冬の陽射かな

気の遠くなるほど寒き頃のこと

隣人のマスク大きく出勤す

靴跡に汚されてゐる氷かな

逢ひたさのつものりて溶けし雪女郎

心細くなりたる夜の遠火事は

うす氷音なく割れてしまひけり

父の背に雲の動ける春田かな

水音の部屋に満ちたる利休の忌

・箱崎吟行

「空」の吟行会で宮崎八幡宮に行ったときのこと。たまたま参道では骨董市が開かれていた。日曜日ということもあってかなりの人で賑わっていた。骨董市は年に何度か開かれているのは知っていたが行くのは初めてだった。吟行もかねて一軒ずつ見ていくととても面白い。昔懐かしいものが溢れている。着物、帽子、アクセサリー、レコード、椅子、花瓶、飾り棚、人形、茶碗等等など。数え上げたらきりが無いほどである。こんなものまで出すのかと思わず笑ったのは泥が付いた蛸壺。いつの間にか俳句を忘れて？真剣に服を選んでいた。値引きの交渉もまた賑やかで楽しい。その日の句会では骨董市の様子が生き生きと描かれている作品も多く、思わぬ出会いの一日だった。

声なき笑ひ

中田みなみ

移植せし水木に蕾初御空

若菜野に出でて充電傘寿くる

欠伸して犬立ち上る四温かな

ひとり居の声なきこれが初笑ひ

ボロ市の往き来耳搔き買ひしのみ

東京の雪柔かし草城忌



又また遠い昔話で失礼します。娘が
小学一年生になった頃、朝、部屋を覗
くと何か考えながら指を折って数えて

雪女よろこぶ青色ダイオード

菜に塩を振りて音出す夜の雪

綿虫や谷戸も奥なる吹き溜り

毛のなかに目のある犬と着ぶくれて

短日や不意に路地より江ノ電車

一打づつ宥さるる鐘日詰まる

控へ目な鐘の音もあり藪柑子

電線の入つてしまふ遠雪嶺

交番のうしろに廻り恋の猫

いる。夜、そろそろ寝付いたかなと見ると、又しきりに指を折っている。初めは気にも止めなかつたが、或る朝のこと、私立小学校なので、給食が無く、お弁当のサンドイッチを作っていると、又傍で指を折って何か数えているのに気づいた。「何を数えているの」と尋ねると、『朝ネ、今日はいくつ楽しいことがあるかなと数えているの』『このサンドイッチも入っているの?』『そう。不思議なの。朝数えたよりも夜になって数えようと、ずーっと多いんだから』不思議だと言うのが可笑しかったが、私は嬉しくて、こみ上げてくる感動に暫し手を休めて浸った思い出がある。

間もなく私は傘寿を迎える。この頃殊に残り少ない月日が愛しく、大切になって来た。心して過ごそうと思う。私を取り巻く全てに素直に感謝しつつ、指を折って楽しいことを数えよう。

冬ぬくし

高 千夏子

冬ぬくし國手余生を鋏に換へ

母作るおむすび小さし寒椿

観音の秩父や寒のふきのたう

義仲の忌の萬兩の白の實や

老い母の寝言かはゆき霜夜かな

初写真笑むは沽券にかかはると



足駆け二十年通った婦人科のA先生が、昨年末ご勇退なされた。大正十二年のお生まれ。三月に八十二歳になられる。薬の名を覚えられなくなつた為と仰るが、多趣味の方。写真が特にお好きでコンピューターで現像もされる。私は、A先生のお陰で、社会復帰が出来た。長い鬱病からの脱却は、俳句と出会つた故だが心に巣くつている脅えは、若年更年期障害となり塗炭の苦しみだった。世田谷に居た頃の医師は匙を投げ、漢方医を紹介。長く通つたが一進一退。そんな中で、東村山に妹家族と家を作り、名医と評判の高いこの先生に診て頂くようになった。その通りで、病を乗り越えて、今で

寒肥を埋め漆黒の土残る

母は

賀状十通見るに半刻笑まひつゝ

探梅行すは鎌倉の道を選び

この中に箱師も乗るか初電車

回想 世田谷大塚代官屋敷

きさらぎや刑具掛かりし部屋に寝て

小筆もて太字書きをり藪柑子

「転居先不明」の朱印花八つ手

四温かな義賊の墓の欠け様も

囀りや枳目大きな漢字帳

も働き続けることが出来ている。「國手」の句は、この度で二度目である。最初は、乳がんの手術をして下さった病院長に献じた。この院長を紹介して下さったのが、A先生。國手の句など乱発出来ない。どちらも名医である。A先生は、「空」の地元の修猷館高校、当時は福岡県立中学修猷館と云ったそうだが、ここをご卒業なさった。日本橋生まれだが、父上がゴム会社の福岡支店長だった為との事。『中野正剛の演説に感動しました』と昔話などもして下さる。玄洋社の「本場」では、そうだったろう。A先生の世代は傑出した俳人も多く出た。共通点はモダンズムと古風さ。ちなみに院長は第一次安保世代。若き日の句いは、何処かに残る。A先生は今後は晴耕雨読で、以前作られていた薔薇作りを再開なさるとの事。昔薔薇作りをしていた私は古くて申し訳ないが、薔薇の本を差し上げた。すでに何株も植えられたとの事。今年の五月頃は、大きな花を咲かせて、それを写真になさって頂きたい。人生の達人のA先生に心からの感謝と敬意を表します。

空集

柴田佐知子選

落雷の跡を曝して銀杏散る
高村 淳

竹伐りて琅扞の束横たへし

行き止まる鉄鎖がありて枯岬

強く爆ぜ童女を照らす吉書揚げ

如月や峰移りゆく鳥の群

草焼いて裾野は起伏新たにす

床下に瓦の古ぶ余寒かな

空作品抄

柴田佐知子

る。「ぼんやりと」の措辞は八つ手の花の姿をとらえて見事である。それを取り巻く鈍い冬の日差し、そして作者のたゆたうような心の有り様までをも伝えてくる。

冬の薔薇ねじれし気持もて余す

あさなが捷

ロッカーに朱戀ごろりと博多駅

遠野

萌

朱戀を抱えたことがある人は分かると思うが、かなり大きくて重いものだ。というわけでロッカーに預けられた朱戀。「ごろりと」そして「博多駅」と一気にたたみかけるように詠むことで、朱戀の量感に充ちた明快な作品となった。「博多駅」の置き方も面白い。

自分でもこれで良いとは思っていないのであるが、どうにも思い直すことができず、果ては自己嫌悪に陥ってしまうことがある。「ねじれし気持」の措辞の妙もさることながら、自分の内側を見据えてストリートに表現する捷さんの作品には、読む者の胸にも直球が入ってくる魅力がある。「捨てきれず愛せず蛇の穴に入る」もこの傾向の作。季語「蛇穴に入る」も微妙な気持を受けて不思議な効果をあげている。

ぼんやりと八ツ手の花のひとつと日かな

秋

千晴

父逝きてより花に酔ふ母の居り

小林

朱夏

八つ手は大きく手を広げたような葉に艶があり庭木としてもよく使われる。日陰でも育つからか、蔵の横や厨の戸口近くなど植えられているのを見かける。冬雲の垂れ込める十一月頃花をつける。たくさんついた花は白く小さいのだが、どこか厚ぼったく湿った印象をうけ

咲き満ちた桜の中の母。父が亡くなった後の母は寄る辺を失い漂うようにも見えたかもしれない。「花に酔う母」と詠みながら、見つめる作者はその向うに深い寂しさを見ているのである。満開の桜がすべての思いを引きうけてしみじみと美しい。

寒紅や吾に翼のありしころ

里中 童子

そう言われると私にも翼があつた。翼を失つた今だから見えるのである。もう二度と訪れることのない青春の輝き。きらきらとしていた時はたちまちに移ろう。すっかり忘れていたものを思い出し、切なくなつたのは、翼のあつた頃から遥かに離れてしまつたからである。感性豊かな童子俳句は時の扉を開いてゆく。

大皿に巴なしたる桜鯛

高村 淳

「よこたへて金ほのめくや桜鯛 阿波野青畝」「ぬれ笹をとけばすなはち桜鯛 鈴鹿野風呂」と桜鯛の句は鮮やかである。掲句の美しさも秀抜である。「巴なしたる」という鮮やかな表記が桜鯛と相俟つて絢爛たる美をなした見事な一句。

古書店の同じ匂ひや冬に入る

田中 せつ

「古書店の同じ匂い」に深く納得した。古書店には確かに同じ空気がある。どこか淀んだような雰囲気匂いで捉えて巧みである。

つまらなし京みやこのなまこ噛みをれば

辻 兎夢

山に囲まれた盆地である京都では生きの良い魚などは手には入らなかつたであろう。京料理はそれを補つて余りある技へと磨かれていったものである。器、盛付、水を打つた細格子のたたずまいなど総合芸術のごとき京料理。ところが作者は一言でばつさりと斬つてしまつた。新鮮な素材に恵まれた博多に住む兎夢さんの言や「つまらなし」である。「なまこ噛みをれば」にいよいよ笑つてしまつた。

そのほかにも取り上げたかった句。

- 一打づつ宥さるる鐘日詰まる 中田みなみ
- 探梅行すは鎌倉の道を選び 高 千夏子
- 実のごとく鳥とまりをり冬木立 苑 実耶
- 練炭に煮豆任せてしまひけり 田島 洋子
- 初雪が雨となる間を豆煮ゆる 小川 涼
- 看取るのみ見つめるのみや虎落笛 ふじの 茜
- やや寒き戸を繰る音も母郷かな 吉村 撰護
- 海見ゆる方に座しけり初電車 桜 三奈子
- 口づけのほてりを冷ます冬三日月 永原 朱
- 風花や壺の中なる喉仏 真中比呂子